

ターニングポイント

竹内 由則 (横浜市立大学データサイエンス学部)

私は東京大学疫学・生物統計学教室出身の生物統計学・薬剤疫学の専門家として紹介されることがありますが、実は東大農学部を卒業した獣医師であり、博士論文のテーマも「イヌの肥満細胞腫における分子標的治療に関する研究」です。学生として上記教室 (正確には「生物統計学分野」) に在籍していたのは、大学院医学系研究科公共医学専攻 (SPH) 在籍時の 1 年に過ぎません。本稿では、私の歩んできた少し特殊な経歴について記したいと思います。

2008 年 10 月、東大大学院獣医学専攻博士課程に在籍していた私は、国立京都国際会館で開催された日本血液学会総会に参加していました。私の獣医師としての専門は血液内科であり、当時は博士課程に在籍しつつ東大附属動物医療センター血液・腫瘍内科で研究および臨床に携わっていました。もちろん対象はイヌやネコですが、関連領域について“ヒトの”医学の最先端を学ぶことは重要と考え、“ヒトの”学会に参加していたのです。さて、会場で何気なくプログラムを眺めていたところ、(今は亡き) 大橋靖雄氏という東大教授の「臨床統計」についての教育講演があることに気づきました。当時、獣医学の学部カリキュラムには統計学の内容がなく (!), 統計解析についてはいずれ勉強しなくてはと考えていたこともあり、その教育講演に出てみることにしました。

一定年代以上の読者の方にはご同意いただけると思うのですが、事前情報なしに大橋先生のご講演に曝露された時の衝撃は凄まじいものです。今考えてみると、統計学そのものに対する内容は限られていたのですが、“ヒト”医学領域でも統計学の教育体制は不十分であること、医学領域には統計学を専門とし生業とする生物統計家が存在すること、統計学 (を含めた公衆衛生学全般) について専門的に学べる SPH が東大に設置されたことなどをお話しいただいたと記憶しています。

2 年後、博士論文をまとめつつ修了後の進路を考えていた私は、東大 SPH に 1 年で修了できるコースがあることを知り、博士課程修了後に東大 SPH に進学し、大橋先生の指導の下で生物統計学を勉強したいという決心を固めていました。大橋先生にその旨についてメールしたところ、入試に合格すれば問題ない旨、ご快諾をいただきました (自分も大学教員になった今となつては、何の紹介もなしに連絡してきた正体不明の獣医師をよく受け入れて下さったと思います)。となると問題は入試ですが、獣医公衆衛生学は学部でも当時 1 コマしか講義がなく、飼料衛生や食中毒の話が中心であったため、医学領域の公衆衛生学について一から勉強する必要性がありました。そこで、つてのある後輩に、当時生物統計学分野の SPH (修士) 2 年生であった篠崎智大さん (現東京理科大) を紹介してもらいました。(今と変わらず) フレンドリーな篠崎さんから学部の講義資料や教科書、篠崎さんの作成された“ウィットに富んだ”入試の過去問解答例をお借りした私は、医師の友人から紹介された「公衆衛生学サブノート」と併せて農学部図書館の自習室に籠る日々を送り、なんとか東大 SPH・1 年 (修了) コースに合格することができました。

当時の東大生物統計学分野の教員は大橋教授を始めとして、松山裕准教授 (現教授)、竹内文乃助教 (現中央大)、上村夕香理特任助教 (現国立国際医療研究センター)、飯室聡特任助教 (現国際医療福祉大) という構成でした。学生では、博士 1 年にいられていた篠崎さんの他、博士 3 年に坂巻顕太郎さん (現順天堂大)、博士 2 年に佐藤泉美さん (現長崎大)、修士 2 年に横田勲さん (現北海道大) などが在籍され

ていました。SPH では疫学・生物統計学を含む講義・演習を受講し、研究室では抄読会（ゼミに相当）・勉強会などで先輩方の（当時はさっぱり理解できなかった）方法論についての研究の話を聞き、獣医時代とは全く異なる世界に刺激を受け続ける日々でした。

私の課題研究（修士論文相当）テーマは、大橋先生が参画されていた「小児喘息に対する空気清浄機のランダム化比較試験」のパイロット研究として、研究室の関係者および本試験実施施設の医療関係者自宅のダニ抗原を評価し、抗原量と各要因との関連を評価するというものでした。本研究で最も労力を要したのは、専用のフィルターを搭載した掃除機（わりと重い）をバッグに入れて被験者のご自宅を回り、寝具から抗原を採取するという地道な作業でした。シンプルな重回帰モデルの結果、自宅の築年数のみが統計学的に有意に関連し、寝具の洗濯頻度などは影響しない（頻繁に洗濯してもダニ抗原は減らない）という身も蓋もない結果が得られました。今となってみれば、統計解析や結果の解釈、論文の構成などは稚拙なものでしたが、臨床試験の現場（？）に初めて触れることができたのは良い経験でした。

SPH の修了が近づくと、再度進路について考える時が訪れます。当初は、1 年間で出来るだけ統計学について学び、それを獣医学領域に持ち帰る予定でした。しかし、希望していた大学教員のポストは空きがなく、ポストクあるいは臨床獣医師として働く可能性を模索していたところ、ふと医薬品医療機器総合機構（PMDA）が定例の専門職員の募集を出していることに気づきました。PMDA の審査専門員には統計担当のポジションもありますが、修士 1 年の経験のみでは対象外との情報が得られたので、採用されれば（獣医師として）毒性審査担当となるだろうと思いつつ、1 年間生物統計学を学んだことを志望理由書でアピールしつつ応募しました。その後、幸い 2 次面接に進んだ私は、当時安全第一部の部長であった池田三恵氏より、「薬剤疫学をやってみる気はないか？」と尋ねられました。SPH 在籍時に日本科学技術連盟の「薬剤疫学セミナー」に書記として参加していた私は、即座に「興味があり、ぜひやってみたい」と回答しました。結果として私は PMDA 安全第一部調査分析課に配属となり、そこで 4 年間にわたり薬剤疫学研究手法を用いた医薬品市販後安全性評価に携わることとなります。

長々と書いてきましたが、俯瞰してみると獣医師から生物統計学・薬剤疫学の専門家へと移行する過程にはいくつかのターニングポイントがあったように思います。特に（故）大橋先生との出会いと SPH 進学、そして PMDA での配属先の影響は非常に大きく、その方向性を大きく決定しました。同じ年代の専門家の方々と比して生物統計学・薬剤疫学領域における経験・知見は明らかに浅く、引き続き精進を続けていく所存です。最後に、方向性の定まらない私の進路を心暖かく（？）見守り、現在の専門領域に導いてくださった、教員の先生方、先輩方、元・現同僚の方々、そして家族にこの場を借りて感謝申し上げます。